第１９９号　令和６年９月１日

ミニデイ【おとこの台所 桜新町だより】

発行責任者　桜新町広報：竹内潔、岡元正史

◉ 永遠の若大将。加山雄三（1937年４月11日～）。

父は戦前戦後の大スターの上原謙。母は女優の小桜葉子（旧姓岩倉。曽祖父は岩倉具視）。正真正銘「おぼっちゃま」。生まれは横浜。幼少の頃は病弱で、心配した上原は茅ヶ崎に転居する。小学校、中学校は地元の公立学校に通った。

◉ 高校進学のときに一念発起、慶應高校を目指して、猛勉強。１日に英単語を200個を暗記。見事に合格する。

◉ 父の上原謙は、立教大学出身。1933年、松竹蒲田撮影所の新人俳優募集に、上原には無断で学友たちが写真を送って見事採用されて、すぐに銀幕の大スターへ。

◉ 加山は卒業を控えて、商社への就職を目指していた。学友の一人が言った。「お前、財産はないかもしれないけど、上原謙という看板がある。会社員になってもお前の給料じゃ、好きな船は作れないけど、俳優なら出来るぜ」。

加山は、父・上原に俳優にないたいと相談したが、頭から反対された。「俳優なんてまったくプライバシーがない」

そばで聞いていた母・小桜が助け船を出す。「本人の人生だから好きにさせましょうよ」

1960年、東宝に入社。初任給は月５万円。茅ヶ崎から成城の東宝砧撮影所まで電車通勤。持参の「ドカ弁（大きな弁当箱）」は有名だ。デビュー作は、谷口千吉監督、三船敏郎主演の「男対男」。初主演は岡本喜八監督の「独立愚連隊西へ」。

1961年、田中友好（ゴジラなど）と並ぶ東宝の二大プロデューサー藤本真澄（さねずみ）が、松竹映画「大学の若旦那」（1933年）を元にした企画を立てる。

当初は３部作の予定で、加山は毎回、同じ演技をさせられるのが嫌だったという。

「エレキの若大将」の挿入歌「君といつまでも」が、350万枚の大ヒット。

作詞は岩谷時子。当時は歌う俳優は歌手より低く見られていて、その年のレコード大賞は、売り上げ枚数では105万枚の橋幸夫「霧氷」に敗れた。

加山と田中のコンビの「若大将シリーズ」は大ヒットし、全17作が製作された。

青大将役の田中邦衛（1932年11月～2021年３月）は「撮影は緊張しなかった。ただロケで世界各地に行けたのが楽しかった」と回想している。

加山というと「若大将」のイメージが強いが、数々の名作での演技の評価は高い。

黒澤明監督「赤ひげ」、成瀬巳喜男監督「乱れる」「乱れ雲」など。

◉ 加山は語る。「音楽ファンの方はミュージシャンとして歌を聴いてくれて、映画ファンの人は役者として映画を観てくれている」。加山雄三は「二刀流」である。

９月の定例会　５日（木）と１３日（金）です。